

学会ニュース

目次

・2016年度学会費納入のお願い	1
・第38回大会および第39回大会について	1
・会則改定にあたって	1
・2016年国際18世紀学会 執行委員会報告(小田部 胤久)	2
・韓国18世紀学会とのさらなる学術交流を目指して(逸見 龍生)	3
・事務局より	5

2016年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾 伸一

学会費未納の会員の方については払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願いいたします。年々、会計状況が厳しくなっております。活発な学会活動の維持と発展のため、会員の皆様のご協力をいただきたいと思います。

第38回大会および第39回大会について

今年度の第38回大会は、2016年6月18日(土)、19日(日)に愛知県立大学で開かれ、盛会のうちに終了しました。開催校責任者の大野誠会員をはじめ、愛知県立大学の方々に篤くお礼申し上げます。

共通論題「18世紀—持続と切斷—」の発表者の方々、コンサートの出演者の方々にもお礼申し上げます。

来年度の第39回大会は2017年6月24日(土)、6月25日(日)に立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂本貴志会員です。詳細は追ってお知らせします。

会則改定にあたって

第38回大会の際に開かれました幹事会および総会において、会則改定について協議いたしました。その結果、事務局にて作成した改定案を会員の皆様にご覧頂き、広くご意見を募ることにいたしました。今回の学会ニュースには現行の会則および改定案を同封いたしました。ぜひご一読頂き、改定案に関してご意見がおありの方は事務局までお知らせ頂けると幸いです。

2016年国際18世紀学会 執行委員会報告

小田部 胤久（東京大学）

2016年8月24日から27日にかけて、国際18世紀学会（以下 ISECS と略す）の執行委員会（EC Meeting）がフィレンツェにて開かれた。後日 ISECS 事務局より詳細な議事録が日本18世紀学会事務局に送られてくる予定なので、以下ではごく簡単に、特に日本の会員に関わる事柄に即して、議事を報告したい。

今回の委員会の開催責任者は、フィレンツェ大学歴史・考古学・地理・芸術・演劇学科（略称は UniFI SAGAS）の Rolando Minuti 教授。参加者は ISECS の執行委員、および各国（ないし地域）の派遣委員、計41名。日本からは ISECS の委員（Co-opted Member）として王寺賢太会員が、日本18世紀学会の派遣委員（いわゆる国際幹事）として私が参加した。

まず Lise Andries 会長による開会の挨拶があり、次いで全参加者が簡単に自己紹介した。続いて、前回ロッテルダム大会の際に開かれた委員会の議事録が承認され、さらに Wolfgang Schmale 事務局長、Pascal Bastien 財務担当委員より、この一年間会務が問題なく行われたとの報告がなされた。ちなみに、ISECS の予算は各会員の会費（2015年までは£1.3、2016年からは£1.5）によってまかなわれており、2015年には約145万の収入に対して、76万円ほど支出された。支出の約6割は若手セミナーの支援に充てられている。以上の数字は、ISECS がいかに質素な学会であるかを物語っている。

新たな national society を ISECS のメンバーとして認めることは学会の活性化にとって不可欠である。今回は The Tunisian Society for Eighteenth-Century Studies の加入の是非が議題となった。

今後の国際大会の開催地・開催時期については多くの会員が関心を寄せられることであろう。2019年の第15回大会はエディンバラ大学で7月14日から19日まで開かれる。通常よりも早い時期に開催されるのは、エディンバラ・フェスティバルとの重複を避けるためである。ちなみに、来年の ISECS 執行委員会はエディンバラで7月17日から20日にかけて開かれるが、その際に詳細な準備状況についての報告がなされる予定である。また、2023年の第16回大会はローマで開催されることが決まった。その大会テーマについて大会主催者 Rosamaria Loretelli（ナポリ大学教授）は antiquity を提案したが、これに対しては、あまりに陳腐ではないか、といった否定的な意見も出された。

若手セミナー（旧東西セミナー）に関してはすでに2019年まで開催予定地が決まっており、2017年はカナダ・モントリオール（フランス・パリから変更）で、2018年はイタリア・ヴィテルボで、2019年はスコットランド・エディンバラで開かれる。2017年のセミナーの応募締め切りは2017年1月30日であるが、旧東西セミナーのOBとして筆者は多くの日本からの応募を期待したい。また、ブルガリア・ソフィアで開かれた2016年のセミナーの報告が Ivan Parvev 氏によってなされた（氏は2014年の ISECS 執行委員会の主催者でもある）。今回のセミナーは、ヴィーン大学の Wolfgang Schmale 教授との協力の下、「啓蒙と農村生活」という題目で開かれた。会議の報告は Lumières Internationales シリーズの一巻として公刊される予定である。

委員会の翌日には、Eighteenth-Century Culture and the Non-European World と題された会議が開かれ、12名が報告を行った。四大陸のアレゴリー像を検討した Schmale 氏の報告、ならびにアメリカ原住民のユートピア化と古代イメージの変遷とのかかわりで扱った Marc André Bernier 氏の報告がとりわけ私の関心を引いた。ちなみに、私は5月に美学会で報告したカント論（「パリのイ

ロクオイ人と孤島のロビンソン」)に多少手直しを加え発表したが、美学会では主としてカント解釈をめぐって質疑応答がなされたのに対し、ISECS の会議ではイギリスにおけるイロクオイ人の表象(たとえば『スペクテイター』に見られる)、あるいはカントのロビンソン・クルーソー解釈に関して多くの質問が提出された。これは ISECS 会員の関心のありかとも対応するものである。

なお、最後に委員会+会議をとおして私の持った印象を記すことにしたい。

第一は、「西高東低」ともいうべき事態。これは ISECS の委員会においてほとんど常態化しているが、今回も東側からの参加は王寺会員と私の2名に限られた。委員会翌日の会議のタイトルも(多少勘ぐりすぎかもしれないが)ヨーロッパ中心主義的な雰囲気を漂わせる。日韓の18世紀学会の交流が恒常化しているだけに、ISECS における西高東低は残念である。といっても、今まで通り地道な活動を続けるほかに、これを是正する何か特別の秘策があるわけではない。

第二は、英語フランス語の棲み分けが進行するのではないか、という予感(ないし直感)である。ISECS は従来から英語とフランス語を公用語とし、議事録も常に二つの公用語で作成されてきた。また、非フランス語圏からの歴代の会長——Robert Darnton、Haydn Trevor Mason、Jochen Schlobach、Keith Baker といった錚々たる面々——のいずれもフランス啓蒙を主たる研究領域とするか、少なくともフランス語にきわめて堪能な研究者であった。フランス語を母語とする研究者にとって、これほど居心地のよい国際学会は稀なのではないか、と思われるほどである。だが、個々の研究者がみな英仏両言語に長けているかといえば、そのようなことはない。たとえば会議の席でも、フランス語の発表は欠席し、英語の発表の時に会場にやってくる、といった英国の研究者に出会った(これは本人談)。研究者の裾野が広がれば広がるほど、あるいは、フランス啓蒙を主たる専門としない非フランス語圏の研究者が ISECS において増えれば増えるほど、こうした傾向は顕著となるであろう。国際化は決して英語化(ないし米語化)ではなく、むしろ多言語主義を容認するものでなくてはなるまい(そして、そのことは日本のとりわけ文系研究者が事ある毎に主張するとおりである)が、それを実践に移すことには多大の困難が伴う。ISECS の場合、学会の使用言語を何にするかという問いは、私たちがいかに過去の啓蒙の理念を継承し、さらに発展させてゆくのか、という問いとも密接にかかわっているはずである。

韓国18世紀学会とのさらなる学術交流を目指して

逸見 龍生(新潟大学)

日本18世紀学会は、すでに長く韓国18世紀学会と共同しての学術交流をしてきた。昨年2015年の国際18世紀学会ロッテルダム大会より、同学会との共同研究はますます緊密になっている。ここではその交流の模様について手短かに報告したい。

①国際18世紀学会ロッテルダム大会、日韓共同シンポジウム「東アジアにおける18世紀研究の現在——韓日から見たルソー、ディドロ、『百科全書』」主催。

2015年7月29日、韓国側からイ・ヨンチュル教授(韓国放送通信大学校)、イ・ヨンモック教授(ソウル大学)、イ・ヨンチョル教授(漢陽大学)、そして博士課程大学院生2名(フ・ジユン、キム・ヨングック)、日本からは寺田元一会員、逸見、および博士課程大学院生2名(飯田賢穂、斎藤山人)がパネリストとして参加し、3時間におよぶ日韓共同シンポジウムを開催した。日韓の若手研究者の研究交流も視野に入れ、フランス文学・思想の領域における現在の18世紀研究の先端的分野をおたがいに紹介しながら、これからいかなる形で共同研究をしていくことができるかを東アジアの研究者同

士とともに考えたいと願っての国際シンポジウムであった。だがそれはまた同時に、たんに地理的・文化的に内へと閉じていくのではなく、非アジア圏の研究者が圧倒的に多数派を占める国際18世紀学会において、どのような個性を発揮して日韓の研究者が研究を営んでいるのかを、できるかぎりにオープンに示したいとも意図していた。当日の会場では、精緻な思想史的テキスト解釈や、実証的な草稿の生成研究、さらには現在の韓国のフェミニズムにおける初期近代テキストの受容と論争など、多様で精彩にあふれた報告が行われた。

幸いなことに、会場には、フランスや北欧、英米などヨーロッパの研究者たちも集って、さまざまに活発に質疑に参加してくれた。また、中国からヨーロッパに留学している若手の研究者たちも、議論の輪に加わってくれたことも喜ばしかった。

②リヨン高等師範学校古典思想史研究所、国際シンポジウム「フォントネル、『百科全書』、王立科学アカデミー」主催。

2016年3月22日～23日、招聘を受けて筆者が研究滞在中のリヨン高等師範学校古典思想史研究所にて、これまでも『百科全書』に関する国際シンポジウムを共同開催してきたフランソワ・ペパン教授（哲学、リヨン高等師範学校）、マリア・スザナ＝セガン教授（18世紀科学思想史、モンペリエ大学）らをリーダーとするフォントネル科学思想研究・『百科全書』研究プロジェクトとともに、18世紀啓蒙思想期における科学思想史を主題とする国際シンポジウムを開催した。ここでは、ロッテルダム大会に続いて韓国側からはイ・ヨン Chol 教授（漢陽大学）、そして博士課程大学院生フ・ジュンさんが、日本からは大橋完太郎会員と逸見がパネリストとして参加。会場にはまた、これもまたロッテルダム大会に引き続いて飯田賢穂さんが加わってくれた。昨夏のロッテルダム国際シンポジウムに続き、日韓の18世紀研究者が国際研究の場でともに議論を交わす機会がえられたことになる。リヨン側からフランスおよびカナダの研究者がパネリストとなり、四カ国の研究者での生産的な討論となった。これをきっかけにして、今後はヨーロッパ、北米、そして日韓の国際共同研究ネットワークを構築する議論が進行中である。

③ソウル大学国際セミナー「日韓における18世紀研究の現在——モンテスキューと『百科全書』」への招聘、および韓国18世紀学会大会への参加。

2016年5月23日、ソウル大学校人文学研究院イ・ヨンモック教授より、同大フランス文学科に王寺賢太会員と逸見が招聘を受け、同校学部生および院生に向けて啓蒙思想に関するセミナーをおこなった。逸見は『百科全書』、王寺会員はモンテスキュー『法の精神』の一節について、それぞれフランス語で論じた。

また、韓国18世紀学会大会にも招待され、日韓18世紀学会の研究交流をさらに深めたいと王寺会員と逸見が会場で挨拶をした。今年度から韓国18世紀学会の役員は一新され、韓国学会会長に就かれた鄭炳説教授（ソウル大学）、金時徳准教授（ソウル大学）をはじめ、アジア圏研究を中心とする錚々たる研究者たちが新役員になられ、会場では友好的な歓待をうけた。お二人は、高橋博巳会員や堀田誠三会員らが中心になってこれまで進めてこられた日韓18世紀学会交流において、積極的な役割を果たしてこられた先生方である。第36回大会での共通論題「18世紀の海の道」での刺激的な日韓交流史の議論は忘れがたい。

以上のように、昨夏以来さまざまな機会を通じて、日韓18世紀学会の学術研究交流はさらに深まり、若手研究者のネットワークを含めた緊密な関係がつくられつつある。来月11月12日に京都大学人文科学研究所では、中川久定会員個人蔵書寄贈「中川文庫」開設を記念して、同研究所ならびに日本18世紀学会の共催で、国際ワークショップ「東アジアで18世紀研究者であること—Hisayasu Nakagawa,

L'Esprit des Lumières en France et au Japonをめぐって」が開催される。オーガナイズの労をとられる王寺賢太会員、増田真会員、そして逸見ら日本18世紀学会会員がパネリストとして参加する予定である。そこにはやはり、イ・ヨンモック教授がパネリストのお一人として参加されることになっている。中川久定先生は、日本とフランス、ヨーロッパとあいだの関係をつねに比較文化史的な構想から深く問い直すことを研究の柱のひとつとされてきた。先生の巨大な18世紀研究のお仕事を手がかりに、日韓の研究者たちが意見を交わし、学術的議論を重ねていく。素晴らしいことではないだろうか。これをきっかけに、さらなる学術交流の深化が果たされることを願っている。



事務局より

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか 苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテ

マ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事に伝達します。)

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。(特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。)

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。(編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。)

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

福田喜一郎	5口	5,000円
計	5口	5,000円

また寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順): 出羽尚、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、隠岐さや香、小田部

胤久（国際学会執行委員）、川島慶子、小関武史（常任幹事、年報担当）、斉藤渉、坂本貴志（常任幹事、年報担当）、武田将明、玉田敦子（常任幹事）、寺田元一（東アジア交流担当）、長尾伸一（代表幹事）、馬場朗、逸見龍生（常任幹事、年報担当）

会計監査：安室可奈子、真部清孝
事務局委員：加藤里紗、松波京子

日本18世紀学会ニュース 第82号 2016年10月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一
事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局
e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com
tel: 052-789-2380
fax: 052-789-4924
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>